TAKE FREE

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

鳥に誘われ、森の奥へ。

Welcome To Tokyo Bird Sanctuary

#20

ISSUE Twenty



Welcome to Tokyo Bird Sanctuary

鳥に誘われ、森の奥へ。

深い森と渓谷に抱かれた奥多摩町は、”野鳥の楽園 "。
標高 2000m 級の山がもたらす都内唯一の亜高山帯から、
多摩川沿いの水辺まで。標高差が生み出す変化に富んだ環境に、
多種多様な鳥たちがひっそりと息づいている。
鳥たちが奏でる BGM を道しるべに、憧れの一羽を求めて。

奥多摩町で「町の鳥」に指定されているヤマドリ。キジ科の日本固有種で、低山から山地のよく茂った林に暮らす。オスは125cmの体長の半分以上にも及ぶ、美しく長い尾羽を持つ。古くから町民に親しまれてきた鳥だが、神出鬼没で狙いを定めて出会うのは難しい。この写真は、町内在住の野鳥写真家・岡部正樹さんが、冬場、いつもの撮影コースで、木の実を食べるヤマドリを偶然見つけて撮影した貴重な一枚だ。

Let's Go Birding

奥多摩ではじめるバードウォッチング入門

道具の選び方から鳥との出会い方まで、はじめの一歩をぎゅっと凝縮。
しっかり準備をして、奥多摩に広がるフィールドに出かけよう。



左から『フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂新版』(日本野鳥の会)、『野外観察ハンドブック 山野の鳥』『水辺の鳥』(日本野鳥の会)、『くらべてわかる 野鳥』(山と溪谷社)、『野鳥と木の実ハンドブック』(文一総合出版)



林さん愛用の「Nikon PROSTAFF 7S 8x30」。値段・視野の広さ・重さが高いレベルでバランスに優れている

Q1.どんなアイテムが必要?

バードウォッチングを始めるなら、ぜひ手に入れたいのが双眼鏡。選び方のポイントは「倍率」と「レンズの大きさ」。倍率は8倍くらいがベストで、これ以上高い倍率だと逆に視野が狭くなって、動き回る鳥を見失いやすくなる。また、レンズが大きいほど視界は明るくくっきりするが、その分値段も重さも上がる。初心者は、レンズの大きさが30〜40mmほどで、価格と見やすさのバランスがとれたモデルを選ぶといいだろう。鳥の特徴を知るためには、図鑑もマストアイテム。なかでもおすすめは、細かな見分けのポイントが分かりやすいイラスト図鑑。フィールドで使いやすいハンディタイプもある。リアルな見た目をイメージしやすい写真図鑑も、必要に応じて使い分けたい。さらに、鳥の声を覚えるために「オクタマトリカルタ」(P10)のようなツールを外出前に使っておくと効果的だ。



氷川渓谷のカワガラス。渓流沿いで、一年を通して見られる留鳥だ。

Q2.奥多摩で出会えるのは、どんな鳥?

奥多摩で見られる鳥は約120種類以上とも言われ、条件が良ければ20種類以上に出会える日も。夏は瑠璃色のオオルリや黄色が鮮やかなキビタキ、渓谷沿いにはクロツグミも姿を見せ、冬にはルリビタキやウソ、カシラダカ、ベニマシコなど彩り豊かな冬鳥に出会えるなど、季節ごとに違う表情が楽しめるのがバードウォッチングの醍醐味だ。渡りの季節には、ふだん奥多摩では見られない鳥が立ち寄ることもある。標高2000m級の山(雲取山2017m)を都内で唯一持つエリアのため、標高ごとに棲み分ける鳥を豊富に観察できるのも魅力。集落周辺に暮らす町の鳥から森の鳥、亜高山帯の鳥まで、幅広い環境に暮らす鳥に出会える。水辺の鳥はやや少なめだが、渓流沿いには警戒心が強く出会えると特別感のあるヤマセミなど、渓谷ならではの鳥もひそんでいる。



奥多摩湖



登計トレイル

Q3.バードウォッチングにおすすめの場所は?

初心者にまずおすすめしたいのが「登計(とけ)トレイル」と「奥多摩湖」の2カ所だ。登計トレイルは奥多摩駅から歩いて行ける森林セラピー専用ロードで、ウッドチップが敷かれた平坦な道が続き一年中歩きやすい。沢がそばを流れる広葉樹の森から針葉樹の森へと続くトレイルなので、夏にはオオルリ・キビタキ・クロツグミなどが集まり、冬はルリビタキやウソ、カシラダカなど多様な環境に暮らす鳥を観察することができる。奥多摩湖は、特に冬がおすすめ。水と緑のふれあい館に隣接する駐車場から小河内ダムの堤頂までの平坦な区間は、水辺と森が両方あって鳥を見つけやすく、狭い範囲だけで20種類以上に出会えることもある。この2カ所で経験を積んでから、季節ごとに見たい鳥を求めて少しずつフィールドを広げていくのがおすすめだ。



ホバリングしながらヌルデの実を食べるジョウビタキ(オス)

ミズキの実を食べるイソヒヨドリ(メス)

Q4.探し方のコツは?

鳥を見つける手がかりは主に「鳴き声」「姿」「痕跡(羽や食べ跡)」の3つ。特に春から夏はさえずりが多く声で見つけやすく、秋冬は葉が落ちて姿を見つけやすくなる。そして、鳥ごとに好む環境を図鑑などで調べ、覚えておくと勝率がUP。たとえば藪が好きなカシラダカやベニマシコなら草むらを、渓流沿いを好むオオルリなら沢のある森を狙うといった具合だ。さらに、鳥が止まりそうな木立や枝を見つけておき、じっくり腰を据えて「待つ」方法も有効。中でも狙い目は、鳥が好む実をつける木で、待っていると渡りの季節には思わぬ鳥が食べに立ち寄ることもある。なお、観察の際は近づきすぎず適度な距離を保ち、鳥にプレッシャーをかけないことが大切だ。また、鳴き声を真似たり音源を再生したりして呼び寄せるのはNG。経験を重ねてフィールドでの「引き出し」を増やしていくのが上達の近道だ。

監修&写真提供:林慶一郎(奥多摩ビジターセンター)

Dear Bird,

岡部正樹さんが語る、ヤマセミのこと


右がオス、左がメスの幼鳥。この年は4羽が生まれた



PROFILE

岡部正樹さん

鳩の巣釜めし店主。奥多摩での撮影にこだわり、店の定休日にはカメラ片手に山へ川へ。「奥多摩の台所」2階ギャラリーにて「岡部正樹 奥多摩野鳥写真展」を2026年11/1(日)から12/6(日)まで開催。

全てをかけて追う、渓流のカリスマ

バードウォッチングの入り口としてよく名前が挙がるのが、青く輝くカワセミだ。その仲間でありながら、ひとまわり大きく、白と黒の鹿の子模様をまとうヤマセミは、渓流に生きる"カリスマ"のような存在である。

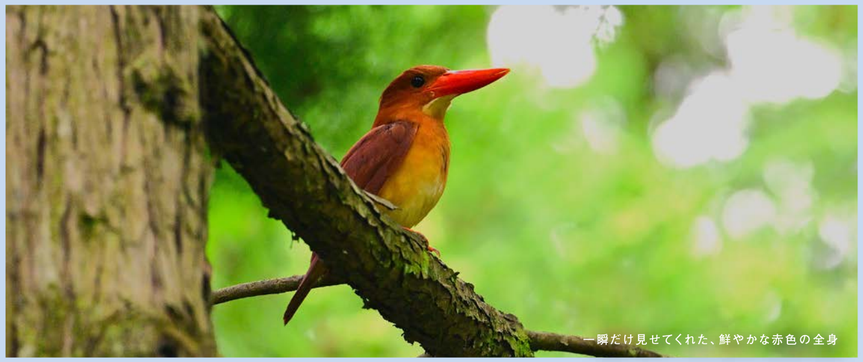
「ヤマセミが、僕は一番好きなんです」。奥多摩在住の野鳥写真家・岡部正樹さんは、そう即答する。本格的にカメラを構えるようになって、もう15年ほど。数え切れないほどの鳥を撮ってきたが、一番惹かれる被写体はやはりこの鳥だという。理由は、簡単には姿を見せてくれない手強さと、それでも通い続けた先にしか見えてこない世界があるからだ。

魚を主食とするヤマセミは警戒心がとても強く、人の気配を200メートル先から察知して飛び去ってしまう。「縄張りは上流2キロ、下流2キロくらいあるんです」。魚を岩に叩きつけて食べた跡など、わずかな痕跡を双眼鏡で探しながら、止まりそうな場所に迷彩のテントを張る。「朝から日没まで、10時間ということもあります。それを1週間でも1ヶ月でも、半年でも待つ。シャッターを切らない日の方が多いですね」

それでも通い続けるのは、鳥が少しずつ心を開いてくれる瞬間があるから。「鳥は紫外線まで見えるので、服装なんかもすぐ見抜かれてしまうんです。それでも通っていると、"この人は危害を加えない"と向こうが分かってくれる。撮らせてくれているんだと思っています」。オスとメスがつがいで巣穴を掘る様子を見続けるうち、「この子たちのお母さん、お父さんは今どうしているかな」と、個体それぞれの物語まで見えてくるようになった。この、時間をかけてようやく築ける信頼関係こそが、岡部さんをヤマセミに惹きつけてやまない理由なのだろう。

構図にもこだわりがあり、被写体をただ画面の真ん中に大きく写すことはしない。「それだと図鑑と同じになってしまうので」。あえて右か左に余白を残し、生活感や空気感まで写し込む。「見る人が勝手に想像力を働かせてくれる。そこから物語が始まるんです」。次に狙うは、「雪の中を舞うヤマセミ」。この冬も、粘り強くそのチャンスを窺う予定だ。

菅俊一郎さんが語る、アカショウビンのこと


一瞬だけ見せてくれた、鮮やかな赤色の全身



PROFILE

菅俊一郎さん

おくたま地域振興財団の職員。ニコン製品と縁が深く「ニコンマニア」とも呼ばれる。撮影した野鳥写真は、同財団のfacebookページにて公開している。

10年越しの想いが叶った、朱色に輝く憧れの鳥

鮮やかな赤褐色の体に、太く赤いくちばし。"森の宝石"とも呼ばれるアカショウビンは、野鳥好きたちにとって憧れの中の憧れだ。夏の間だけ日本に渡ってくる希少な鳥で、その姿を一目見ようと、全国のバードウォッチャーが名所へと足を運ぶ。ついに今夏、奥多摩でその写真を収めたのが、ニコンマニアとしても知られる、おくたま地域振興財団の菅俊一郎さんだ。

生き物好きが高じて大学では森林学を学び、自然ツアーなどを手がける同財団に就職。当時は鳥にもカメラにも興味がなかったというが、鳥好きの同僚の入社をきっかけにニコンの双眼鏡を購入。新婚旅行用に買ったニコン製一眼レフの性能にも惚れ込み、大好きなイシガメを野生で撮ろうと超望遠レンズに手を出したが、レンズの前によく現れるのは鳥ばかり。気づけば、被写体はすっかり鳥に変わっていた。

そんな菅さんにとって、長年の憧れだったのがアカショウビンだ。10年前、"行けば100%見られる"と言われる長野県戸隠まで、同僚と2泊3日の旅に出た。朝4時に起き、2日間で合計26時間、山を歩き続けた。それでも姿はどこにも見当たらない。最終日の夕方、藁にもすがる思いで現地のバードウォッチャーに声をかけると、1年前に熊が出て発砲音に驚いたアカショウビンが巣を放棄し、今年は来ていないという、崩れ落ちるような知らせが返ってきた。その夜、現地のガイドが見られる鳥のリストを教えてくれて気がついた。「これ、よく考えれば全部奥多摩で見られるじゃん」。以来、菅さんは自分の中にひとつの決まりを作った。「奥多摩町内でしか鳥を撮らない」というルールだ。

菅さんの撮影スタイルは、待ち伏せをして粘るのではなく、テクテクと山道を歩きながら、目に映るものをとにかくシャッターに収めていくというもの。奥多摩でも鳴き声だけは何度か耳にしていたアカショウビンだが、ある日いつものように歩いていると、ふいに鳴き声が聞こえ、目をやるとそこに、全身赤く輝くアカショウビンがいた。咄嗟にカメラを向け、シャッターを切ることわずか数秒。偶然の、そして一瞬の邂逅だった。「まさかこのタイミングで撮れるとは思わなくて。本当に嬉しかったですね。惚れ込んだニコンのカメラとレンズがしっかり仕事をしてくれました」

愛鳥家が語る、憧憬の鳥のこと。

たった一つの町の中に、これほど多様な憧れが息づいている。4人の愛鳥家が語る、
それぞれにとって特別な一羽との物語。

林慶二郎さんが語る、ホシガラスのこと


金峰山で出会った、憧れのホシガラス



PROFILE

林慶二郎さん

奥多摩ビジターセンター解説員。学生時代からの筋金入りの愛鳥家で、憧れの鳥を追って各地を旅してきた。双眼鏡と図鑑を携え、日々奥多摩の自然を案内している。

星空模様のカラスに会いに高山の森へ

カラスの仲間でありながら、街で見かけるハシブトガラスやハシボソガラスとはまるで違う雰囲気を持つ鳥がいる。ホシガラスだ。体はハトほどとひとまわり小さく、こげ茶色の羽に散らばる白い斑点を、夜空に散らばる星に見立てて、この名がついたという。

ホシガラスは、ハイマツなど針葉樹の実を主食とする、亜高山帯から高山帯特有の鳥である。秋になると木の実をくちばしで運び、あちこちに埋めて隠す「貯食」という習性を持つ。食べきれずに残った実の中から新しい木が芽吹くこともあり、高山の森を陰ながら支えるという知られざる役目も。本州中部では標高1500m以上が生息の目安とされ、めったに出会えない鳥でもある。

林慶二郎さんがこの鳥に憧れたのは、高尾に住んでいた頃のことだという。

「ホシガラスがどうしても見たくて、立山まで行って。当時住んでいた高尾から、電車とバスとケーブルカー、ロープウェイを乗り継いで片道5時間。交通費だけで5万円くらいかかりましたね」。

長い道のりの末に辿り着いた立山で、空を飛ぶホシガラスの姿を、ようやく拝むことができ、喜びもひとしおだったという。

その後、富士山にも足を延ばした。車で2時間かけ、五合目付近を歩いているときにその姿を捉えることができたそうだ。

一方で、今回の写真は、奥秩父の山並みに連なる金峰山で撮影されたものだ。金峰山は山梨県と長野県にまたがり、奥多摩も含まれる秩父多摩甲斐国立公園にある山である。秋から冬にかけては、東京都最高峰の雲取山にも、越冬のためやってきたホシガラスを見ることができるという。

「2024年9月には、雲取山の避難小屋付近や標高1000m付近で、姿を見ることができました。遠い山まで追いかけた鳥が、実は自分が働く奥多摩のフィールドにもいることに感動したとともに、あらためて奥多摩の自然のポテンシャルを実感しました」

原島香さんが語る、フクロウのこと



フクロウの成鳥と幼鳥を描いたイラスト。見る側に親しみを持ってもらいたいという思いから、リアルに描くよりもデフォルメして描くことが多いという



PROFILE

原島香さん

山のふるさと村ビジターセンターのインタープリター。中学時代から鳥の絵を描き続け、園内の展示イラストも手がける。石や羽を集めるのも好きで、来園した子どもたちとよく交換もする。

この森で、フクロウの雛に会いたい

奥多摩湖のほとりに広がる山のふるさと村。ダム建設によって沈んだ村の一部がそのまま公園に含まれているため雑木林も多く、国立公園内でも「第二種特別地域」に指定されている。水辺や森など多様な環境が入り混じり、一年を通じて120種ほどの鳥と出会える場所だ。そのビジターセンターでインタープリターを務める原島香さんは、大の野鳥好き。得意のイラストで、園内の展示や解説パネルにも彩りを添えている。

野鳥に惹かれたのは、中学生の頃。夏休みに参加した、北海道での2週間のキャンプ体験がきっかけだったという。

「シマフクロウの研究を何十年も続けている人とか、ユニークな大人たちと出会って、世界って広いんだなって感じて。そんな面白い大人たちが熱中する鳥って、一体どんな存在なんだろうって思ったのが野鳥好きの入り口でした」。

以来、ずっと好きだというのがフクロウの仲間だ。フクロウは木のうろに巣を作る樹洞営巣性の鳥。フクロウが営巣できる大きさの樹洞ができるのは樹齢100年以上の古木になるが、一つがいで2、3の候補地を持ち、最も良い場所を選んで繁殖するため、太いうろの木が何本も必要になる。広葉樹と針葉樹が混じり合い、餌となるネズミも豊富なこの森は、完全な肉食であるフクロウにとって条件の揃った環境だという。実際に声を耳にし、羽を拾ったこともあるが、とりわけ憧れが募るのはその雛の存在だ。

「この森でフクロウが育っていくのを知りたい気持ちが強くて。どこかのツアーに参加すればもっと簡単に見られるかもしれませんが、ここで声を聞いたり羽を拾ったりしながら、自分の目でその証を見てみたいんです」

繁殖の時期、フクロウはとても警戒心が強く、不用意に近づけば巣を放棄してしまう。そのため営巣している気配を感じても、遠くからそっと距離を保ちながら見守っているという。2008年からこの森に関わり続けて、もう20年近く。

「いつかフクロウの雛にも会えて、"この森はフクロウが暮らせる森なんだ"と実感したいんです」

OKUTAMA 鳥暦

標高差に富んだ奥多摩には、季節ごとに違う鳥たちが訪れる。渡り、さえずり、巣立ち。

The Bird Watching

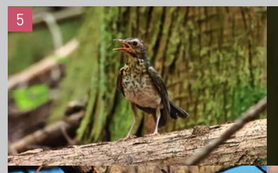


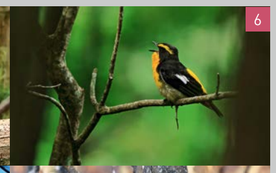
1.オオルリ:　瑠璃色の羽に金色の美声。奥多摩のさえずりシーズンを代表する夏鳥の一羽だ。
2.アオバト:　「アオーアオー」。どこか物悲しい鳴き声が特徴の、緑色のハト。
3.エゾムシクイ:　「ヒーツーキー」。他のムシクイ類とは一線を画す、三拍子のワルツ調の節回しでさえずる。
4.ミソサザイ:3月、渓谷沿いでいち早く歌い始める小さな鳥。体格に見合わぬ複雑な節回しが持ち味。
5.クロツグミ:　全身ほぼ黒いオスが、口笛のように澄んだ声で朗々とさえずる。
6.キビタキ:　黒地に鮮やかな黄色とオレンジをまとう夏鳥。澄んだ美声の持ち主で、「オーシーツクツク」「ソフトクリーム」など、聞きなしも多彩。
7.アカゲラ:　白黒に赤の差し色が鮮やかなキツツキ。アオゲラと競うように木を叩く音を響かせる。
8.アオゲラ:　緑色の体に赤い頭。ドラミングの音が森に響き渡ると、春の訪れを感じる。

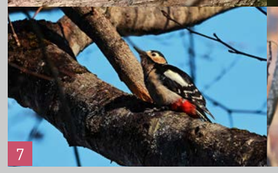


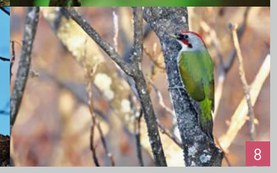












SPRING 春

渓谷に、夏鳥たちの声が満ちる

3月に入ると、ひっそりと冬を過ごしていた小さな体のミソサザイが、渓谷沿いで大きな声と複雑な節回しを響かせ始めます。奥多摩では、繁殖のために南から渡ってくる「夏鳥」の第一陣であるイワツバメが、3月の15日前後には姿を現します。ミツバツツジが渓谷を彩り始める4月に入ると、1週目・2週目あたりからオオルリ・センダイムシクイ・ヤブサメなどの夏の歌い手たちが奥多摩に到着し、いよいよさえずりシーズンの到来。
アオゲラ・アカゲラ・オオアカゲラなどキツツキ類のドラミングも森に響き渡る中、ツツドリ・アオバト・キビタキ・クロツグミ・アカハラ・マミジロ・コマドリ・コルリ・エゾムシクイ・ジュウイチ…新緑の中に声も姿も美しい夏鳥たちが次々に出揃い、5月中旬にホトトギスが到着すると、奥多摩の山々が最も賑やかな季節を迎えます。
梅雨入り前までは、タイミングが合えば、一カ所で20種類以上の鳥の声が聞こえることも。

一年を通じて表情を変える森の、鳥たちの暦をたどる。

Calendar

写真
岡部正樹さん
鳩の巣で釜飯店を営む傍ら、野鳥写真家としても活動。撮影歴15年、メディアへの写真提供や写真展も精力的に手がけている。

文
田畑伊織さん
奥多摩ビジターセンターのインタープリター。専門は東京都内のカモシカ調査。奥多摩・奥秩父地域の自然研究や調査に取り組む。





涼を求めて、亜高山の森へ

緑が濃くなり梅雨シーズンを迎えると、子育て中の鳥たちの姿は見づらくなりますが、雨に煙る森の奥から奥多摩の方言で「びんどろろ」と呼ばれるアカショウビンの声が聞こえてくればラッキーです。
夜になると、アオバズクやトラツグミ、ヨタカの声も聞こえるかもしれません。
梅雨が明け夏休みに突入する7月8月、駅前の電線には、巣立ちはしたもののまだ尾の短いツバメの幼鳥たちが並んでいます。
川遊びで賑わう河原では、キセキレイ・ハクセキレイ・セグロセキレイが長い尾を振りながら歩き回っています。
足に自信があれば、標高を上げて涼しい山の上までに登ってみましょう。
頑張って雲取山周辺まで登山ができたら、山頂周辺の亜高山の森に、メボソムシクイやルリビタキ。
都内ではここだけのさえずりが聞こえてきます。

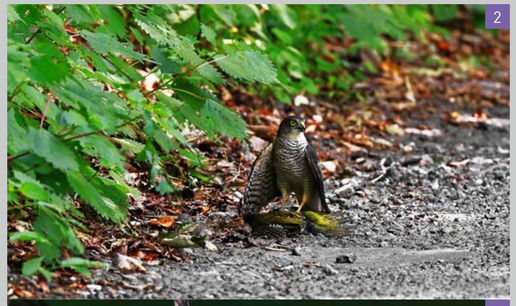




1.アオバズク:　フクロウの仲間には珍しく、夏だけ日本にやってくる渡り鳥。つぶらな黄色い目が印象的な、小柄な姿だ。
2.セグロセキレイ:　日本固有種。河原を、長い尾を上下に振りながら歩き回る夏の常連だ。
3.ルリビタキ:　雲取山周辺の亜高山の森でさえずる。都内でこの声が聞けるのは奥多摩だけ。
4.キセキレイ:　黄色い腹が目印。セグロセキレイと同じく、尾を振りながら河原を歩く。
5.トラツグミ:　夜、「ヒョー」という寂しげな声が森から聞こえてくることがある。古くから妖怪「鵺(ぬえ)」の声だと言われてきた。

SUMMER 夏







秋 AUTUMN

1.ジョウビタキ：オレンジ色の腹が目印。奥多摩の方言で「だんごしょい」と呼ばれ親しまれてきた。
2.ツミ：日本最小級のタカ。奥多摩でも繁殖し、秋晴れの日には渡っていく姿が見られることもある。
3.ミサゴ：魚が主食のタカ。奥多摩湖の水面へ急降下して狩りをする姿が見られることも。
4.マヒワ：冬の森に黄色味が鮮やかな、群れで木々を移動する冬鳥。
5.アトリ：群れで行動し、賑やかな鳴き声を響かせる冬鳥。マヒワと同じ頃に姿を見せる。

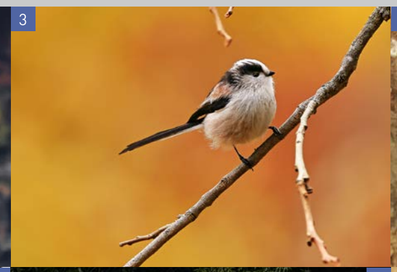




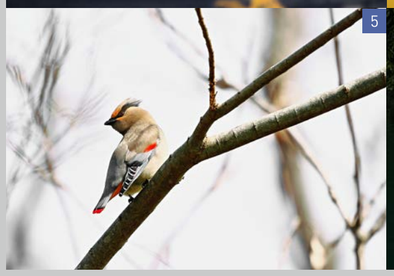
紅葉とともに、冬鳥がやってくる

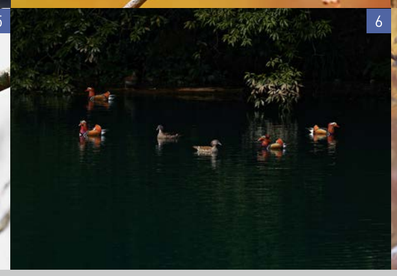
9月になると、夏鳥たちは次々に南へと渡っていきます。
下旬から10月上旬にかけては、天気の良い日は奥多摩の東側の標高の低い地域ではサシバやハチクマ、西側の標高が高い地域でも、西・南東の方向へ飛び去るツミなどが、奥多摩湖では魚が主食のミサゴが立ち寄ったりなど、奥多摩でも鷹の渡りが見られます。
10月下旬には、紅葉が始まる標高の高い山にはアトリやマヒワなど、越冬のために北から奥多摩に渡ってくる「冬鳥」が到来。
秋も深まる11月15日前後には、集落の周りにも奥多摩の方言で「だんごしょい」と呼ばれるジョウビタキが姿を見せ始めます。













葉が落ち、鳥影を探しやすい季節

紅葉が終わり、乾燥して空気が澄み渡る12月。
ひらけた場所で青空を見上げていると、奥多摩の豊かな森の象徴であるクマタカを始めノスリ、ハイタカ、ハヤブサなどの猛禽類が、北風に乗って飛ぶ姿を発見できるかもしれません。
集落周りの明るい藪では、ホオジロやカシラダカ、ベニマシコの小群のなかにミヤマホオジロの姿も。林縁の暗い藪には、アオジやクロジがひっそりと餌を探しています。
厳冬期に入る1月、雪に閉ざされた標高の高い山から、ホシガラス・カヤクグリが奥多摩の山に降りてきたり、アトリ・マヒワなどの賑やかな小鳥の群れもより標高の低い森へ。年によってはウソの群れが桜の木に集って、芽を食べ散らかす姿を見ることができるでしょう。
奥多摩湖や白丸湖では、数は少ないながら、マガモなどのカモ類やひょっとするとカワアイサの姿が。
レンジャク類やオオマシコ、ハギマシコ、イスカなどちょっとおしゃれな色合いの冬鳥が姿を見せることも。
また、これまであまり目が向かなかった、一年中奥多摩で過ごしている「留鳥」が主役を張るのもこの季節。
落葉して見通しが良くなる森の中で、シジュウカラ・ヤマガラ・コガラ・ヒガラ・ゴジュウカラ・エナガ・メジロ・コゲラ・キクイタダキ・キバシリなどの小鳥たちが「混群」を作り、寒さに負けず森の中を流れるように飛び回る様子に、元気をもらうことができるでしょう。
見通しの良い林床では奥多摩町の鳥、ヤマドリの姿を見ることができるかもしれません。
スギ花粉で憂鬱な2月。底冷えする渓谷沿いではカワガラスが早くも繁殖のシーズンに入ります。
人影のない川辺ではヤマセミの姿を目にすることができるかも。
冬の間群れで過ごしていたオシドリも、徐々に番（つがい）で過ごす時間が長くなり、夜の森にフクロウの声が響き渡るようになると、奥多摩の春もすぐそこです。



1.ハギマシコ：萩の花のような淡い色合いが名の由来。冬にだけ出会える、おしゃれな配色の鳥。
2.クマタカ：奥多摩の豊かな森の象徴。晴れた日、北風に乗って悠々と飛ぶ姿が見られるかも。
3.エナガ：混群の中でもひときわ小さく愛らしい留鳥。長い尾を揺らして木々の間を飛び回る。
4.フクロウ：夜の森に声が響き渡るようになると、その先には奥多摩の春が待っている。
5.ヒレンジャク：冠羽と、尾の先の赤色が名の由来。ヤドリギなどの実を好み、群れで木々を渡り歩く冬鳥だ。
6.オシドリ：冬は群れで過ごし、春が近づくにつれ、次第に番(つがい)で過ごす時間が長くなっていく。
7.ウソ：口笛のような澄んだ声で鳴く。群れで桜の木に集まり、芽を食べ散らかすことも。雲取周辺の亜高山帯で繁殖する。

WINTER 冬

イラスト/ 原島香

Make Room For Birds

小鳥を待つ庭。

巣箱をひとつ掛けるだけで、庭は鳥たちの子育ての舞台になる。巣箱の設置と観察のコツについて巣箱づくりも体験できる奥多摩湖畔の自然公園「山のふるさと村」のインタープリターに話を聞いた。

東京都立奥多摩湖畔公園 山のふるさと村
奥多摩町川野1740
https://www.yamafuru.com/

巣箱ではじまる、庭の子育て物語

日常生活の中で、野鳥の存在をもっと身近に感じるには？　庭に巣箱を設置するというアプローチはどうだろう。

「シジュウカラやヤマガラなど樹洞営巣性の鳥にとって、巣箱は、木の幹にできた『うろ』の代わりになる貴重な存在です。巣箱の入口の穴の大きさで住人はほぼ決まり、シジュウカラやヤマガラなら2.8cmほど、スズメは3cm前後、ムクドリになると5cmほどが目安。子育ての様子やひなの巣立ちなど、普段なかなか見られない鳥たちのドラマを観察できますし、お庭にひとつ設置してみると楽しいですよ」。

そう教えてくれたのは、山のふるさと村ビジターセンターの原島香さん。気軽に木工体験ができる同施設内のクラフトセンターでは、鳥の巣箱づくり（500円）が人気。自分で作った巣箱にある日野鳥が営巣してくれたなら、喜びもひとしおだ。とはいえ、鳥に選んでもらうには気を配らなければならないことも多いという。

「取り付ける高さは地上2m前後。天敵のヘビや猫が手を出しにくい高さに設置しましょう。雨水が溜まらないよう入口はやや下向きに。シジュウカラは縄張り意識が強いので、庭に何個も掛けるより1個の方が、営巣確率が上がると思います。早いと4月から営巣が始まるので、冬のうちに取り付けを済ませておきましょう」

本格的な営巣時期は、初夏の5〜6月頃。無事に鳥が入居したあとにこそ、最も気を配りたい。

「親鳥のカップルが苔などの巣材を運び入れ、そこに卵を産み、抱卵へと進んでいきます。この時期の親鳥は普段以上に警戒心が強い。興味があってもそっと距離を保ち、ひなが孵ったあとも近づきすぎないようにしましょう。無理に覗き込んだりすると、親鳥が卵やひなを置いて巣を放棄してしまうことも。親鳥がせっせと餌を運んでくる様子から、日に日に育っていくひなの気配は感じ取れるはずです」

そしてやってくるのが、子育てサイクル一番の見どころ、巣立ちの瞬間だ。

「初めて巣穴から出たひなは、まだ上手に飛べず、庭先でばたばたと羽ばたく姿がなんとも可愛らしい。巣立ちは一瞬なので、うまく立ち合いタイミングが合った時はラッキーです。手は出さず、そっと見守りましょう」

一度目の子育てを終えたあと、同じ巣箱で夏の終わり頃まで2回目の子育てが始まることもあり、シーズンを通して長く楽しめるのも巣箱の魅力。繁殖が終わったら、巣箱の清掃を。年に1回熱湯消毒をしておくと衛生的で、次の入居者も気持ちよく迎えられるという。

今年も来てくれるだろうか——。庭の巣箱が、春が訪れる喜びを一層、豊かなものにしてくれるはずだ。

Listen Like a Bird

オクタマトリカルタで鍛える”野鳥耳“



オクタマトリカルタ
2,500円（税込）
販売場所:
町内のお土産取扱店



あそびかた

1 鳥の写真カード（取り札）を並べる
2 スマホでQRコードを読み、鳴き声を流す
3 その声に合う鳥のカードを取る
4 一番多くカードを取った人が勝ち



①ルリビタキ　②オオアカゲラ　③ヒヨドリ　④キビタキ ⑤ミソサザイ ⑥ジョウビタキ　⑦アカハラ　⑧オオルリ
⑨サンコウチョウ　⑩ヤマドリ　⑪アオバト　⑫コマドリ

「オクタマトリカルタ」は、奥多摩に生息する33種の野鳥の鳴き声を聞き分けて遊ぶ、かるた形式のカードゲームだ。スマホでQRコードを読み込むと鳥の鳴き声が流れ、その声に合う鳥の写真カードを取り合う。収録されているのは、奥多摩で実際に鳴く鳥たち。繰り返し遊ぶうちに、自然と鳴き声を覚えられる仕組みになっている。販売も奥多摩の土産店限定というこだわりが、逆に人気を呼んでいる。

考案したのは、奥多摩・白丸湖畔でカヌースクールを営む後藤めぐみさんと、友人でゲームデザイナーの濱田隆史さん。きっかけは、後藤さん自身が鳥の声をなかなか覚えられずにいたことだった。「鳥のガイドさんに何種類も教えてもらうんですけど、後から思い出せなくて。なんとか声を覚えたいと思ったんです」。

以前は、鳥の声はただの「音の壁紙」だったと後藤さんは振り返る。森を歩いていても、川の上でカヌーを漕いでいても、鳥の声は景色に溶け込む背景音の一つに過ぎなかった。ところが開発の過程で鳴き声を何度も聞き込み、奥多摩の鳥だけを描き起こす作業を重ねるうち、少しずつ耳が育っていった。ある春、ミソサザイの声を初めて聞き分けられた瞬間、「あ、春告げ鳥が鳴いている」と感じたり、渡り鳥のサンコウチョウのように決まった時期にしか聞こえない声を覚えたりするうちに、鳥の声そのものが季節のしるしになっていった。

耳が育つと、世界の見え方も変わった。ひとつひとつの鳴き声が、くっきりと際立って聞こえるようになったのだ。

「オオルリとキビタキって鳴き方がすごく似ているんですけど、オオルリは最後に『ジジッ』と付くのが決め台詞。そこが分かってからは、あ、今のはオオルリだ、ってすぐ区別できるようになりました。奥多摩でカヌーを始めた30年前からずっと鳴いていたはずなのに、以前はその存在すら知らなかった鳥たちも、聞き分けられるようになった。森の中を歩いていても情報量が全然違って。解像度が違うというか」

双眼鏡を持ち歩き、スケッチを重ね、わからない鳥は図鑑で調べる。ある日、カヌーの上でふと湖に浮かぶ小さな羽を見つけた。ふわふわとした羽の先だけが青緑色をしていて、「これはアオバトかもしれない」と姿の見えない鳥の正体を推理する。そんな小さな手がかりから鳥に出会う楽しみも、後藤さんは教えてくれた。

「決して同じ感想にはならないと思うけれど、トリカルタに出会うことで、それぞれの新しい世界の扉が開くといいなと思っています」

もともと鳥が好きな人よりも、ちょっと興味があるという人にこそ手に取ってほしいと後藤さんは話す。トリカルタを手に、いざ奥深き野鳥ワールドの入口へ。



PROFILE
後藤めぐみさん

1997年開業のカヌースクール「グラビティ」代表。リバーカヤック歴30年以上、世界で活躍した競技経験も。趣味の林業や、土中環境を整える「めぐる水講座」も主催し、山や川と暮らしをつなぐ活動を続けている。

トリカルタに収録されている鳥の声を聴いてみよう

アオバト【きっと聞こえる】
ミソサザイ【きっと聞こえる】
オオルリ【探せば聞ける】

音源提供=NPO法人バードリサーチ

羽を集める、羽を読む。



Letters From Birds

山道でふと目に留まる、一枚の羽。鳥の体からすればほんの小さな欠片にすぎないのに、実は驚くほど雄弁だ。

「模様やカーブ、硬さのひとつひとつに、どの鳥の、体のどの部位に生えていた羽なのかという情報が刻まれています。拾った場所と日付を記録すれば、そこにその鳥が確かにいたという立派な標本にもなる。羽が落ちてるのを見つけると、鳥から手紙をもらったような気持ちになるんです」

そう語るのは、奥多摩ビジターセンターの田畑伊織さん。子供の頃から野鳥好きだった田畑さんは、小学5年生の頃から羽を拾い集めてきたという。何の鳥のものかわからないときは山階鳥類研究所に問い合わせたりしながら、羽という落とし物を手がかりにあらゆる鳥と対話し、そしてまたフィールドへ。羽を読む力は、そのままバードウォッチングの解像度を上げることにもつながるのだ。

「鳥の羽には、保温のために体に生える『ダウン』と、飛ぶために翼や尾に生える『フェザー』がありますが、模様や丸みのつき方にはパターンがあって、それを覚えると、体のどの部分の羽か、ひいては鳥の姿全体まで見えてくる。羽を拾ったことで、いつ、どこでその鳥に出会えるかも予測できます」

羽観察の魅力は、羽の特徴から鳥たちの戦略が読み取れることだという。しかも実際に手で触れ、質感を確かめながら——。フクロウの羽を手に取った田畑さんは、それをそっと手の甲に当てるようにして見せてくれた。

「フクロウは夜に音を立てず獲物へ忍び寄るので、風切り羽の縁がギザギザになっていて、羽音を消しています。触ってみると、手のひらに触れた感覚がないくらい柔らかい。この仕組みは新↙幹線のパンタグラフにも応用された、有名なバイオミミクリの一例です。一方、魚を捕らえるシマフクロウにはこの消音の仕組みがありません。水中の獲物には羽音が聞こえないからでしょうね」

もちろん、単純に「かっこいい」羽を集める楽しみもある。たとえばアカゲラの、お腹の鮮やかな赤い羽。あるいは、奥多摩の森の頂点に立つ猛禽、クマタカの鮮やかなコントラストの風切り羽。あるいはヤマドリの尾羽——1枚だけを見ると水玉模様だが、何枚も重なることで翼の白い帯状の模様になる。模様の違いで性別や年齢まで読み取れるという羽の見方もまた面白い。

一方で、いまだ謎に包まれたままの鳥もいる。

「雄のサンコウチョウのあの長い尾羽、春に日本で見かける時にはもうすでに長くなっていて、秋の渡りの時期には長い尾の雄は見た記憶がない。羽の生え替わり方とか、年齢や栄養状態によっても長さが変わるのか、まだよくわかっていないようです」

あの長い尾羽が、どこかの森にまだ誰にも見つけられないまま落ちているかもしれない——そう考えると、いつもの散歩道が急に特別なものに思えてくる。

「拾得や所持が禁じられている場合もあります（国立公園特別保護地区や、文化財保護法・種の保存法・ワシントン条約指定種）が、そこさえ気をつければ、羽拾いは誰にでも開かれた楽しみです。ふと羽を拾ったら、ぜひじっくり眺めてみてほしい。模様ひとつ、欠け方ひとつにも、その鳥の物語が刻まれています」



お気に入りの羽を額装。手元に残っている羽は少なく、プレゼントしたものも多いという

PROFILE 田畑伊織さん

株式会社自然教育研究センター特別研究員／奥多摩ビジターセンター インタープリター。専門は東京都内のカモシカ調査。奥多摩・奥秩父地域の自然研究やガイドで幅広く活動する。



地図に残る、鳥の記憶。

BIRDS HIDDEN IN NAMES

奥多摩のあちこちに残る、鳥にちなんだ地名。
その由来を辿ると、鳥と共にあるかつての暮らしの風景が浮かんできた。

01 THE HAWK'S NEST MOUNTAIN 鷹ノ巣山

標高1736m、石尾根の主峰にあたる奥多摩三山の一つ



鷹狩り用の鷹の雛を捕った「御巣鷹山」の名残

「鷹ノ巣山」という名は、かつて全国各地にあった「御巣鷹山」という地名の名残だ。江戸時代、鷹狩り用の鷹の雛を捕獲することを命じられた地域を指し、幼い鷹を巣立つ前に捕らえるという、かなり厳しい役務を村人たちは課されていたという。奥多摩でも、かつては広い範囲がそう呼ばれていたらしい。それがいつからか、標高1736mのこの一峰だけを代表して「鷹ノ巣山」と呼ぶようになり、そのまま地名として定着したのだそうだ。



水神社の森に鳩が巣を作ったことに由来

江戸時代、明暦の大火で焼けた江戸の復興のため、奥多摩の木材が多摩川を通じて盛んに運ばれた。渓谷沿いには木材を運ぶ人夫たちが寝泊まりする飯場小屋が建てられ、水神社が祀られた。この水神社の森に二羽の鳩が仲睦まじく巣を作り、村人たちがそれを霊鳥として大切に愛護したことから、この地は「鳩ノ巣」と呼ばれるようになったと伝わる。水神社は今も渓谷内でひときわ目立つ大きな岩山の上に祀られ、訪れると見上げることができる。

02 THE DOVE'S NEST 鳩ノ巣

多摩川沿いの渓谷にある、青梅線鳩ノ巣駅そばの集落名

03 西谷山 VALLEY OF BIRDS MOUNTAIN

標高1718m、日原最奥にそびえる長沢背稜上の山

実は鳥とは無関係、峠道の名が訛った説

「西谷山」という字を見ると鳥にちなんだ山に思えるが、実はもともと鳥とは関係がないという説がある。日原の人々が秩父へ抜ける峠道を「通る尾根」と呼んでいたのが訛り、「鳥谷」となったというのだ。ちなみに秩父側の人々はこの山を「黒どっけ」と呼んでいたという。

04 燕岩 THE SWALLOW ROCK

日原・小川谷右岸にそそり立つ、崖のような岩峰

夏、イワツバメが巣を作ったことが名の由来

「燕岩」は、ツバメ岩、ツバクロ岩とも呼ばれてきた、日原・小川谷右岸にそそり立つ石灰岩の岩峰だ。夏になるとこの切り立った岩肌にイワツバメが巣を作っていたことが、名前の由来と伝わっている。人が容易には近寄れない険しい岩肌は、外敵から雛を守るのにうってつけの場所だったのだろう。今もその名の通り、夏にはイワツバメの姿が見られることがあるという。



ウトウは、ハトほどの大きさの海鳥だ。奥多摩には馴染みのない鳥の名がなぜ山の頂名になったのか。能の演目「善知鳥」には、親子の強い絆で知られるこの鳥の雛を、猟師が生活のために捕り続けたために死後、地獄で苦しめられるという物語がある。標高1588m、日原最奥のタワ尾根上にそびえるこの一峰の周辺は非常に深い谷で、一度入ると抜け出しにくいとも言われ、猟師が苦しみもがいたというこの伝説とも重なったのが由来という説がある。山頂には、ウトウの姿を描いた小さな絵看板があり、登山者のフォトスポットにもなっている。

05 PEAK OF THE AUKLET ウトウの頭

標高1588m、日原最奥・タワ尾根上にそびえる一峰

06 THE BIRDS' RIDGE 鳥屋戸尾根

蕎麦粒山から南へ長く延びる、日原エリアの尾根

蕎麦粒山から南へ伸びるこの尾根は、「トヤドオネ」と読む。「トヤ」とは、鳥を捕まえるための仕掛けを指す言葉だ。渡り鳥は山を越える際、尾根がへこんだ鞍部を選んで飛ぶ習性がある。そこに網を張って待ち構えれば、山を渡る鳥を効率よく捕らえることができた。そうした場所を「トヤ」「トヤド」と呼び、それが地名として残ったのがこの尾根だ。捕える習慣は現在はなくなったが、もしかすると今この瞬間も人知れず、渡り鳥たちがこの尾根を越えているのかもしれない。



監修／田畑伊織、小林奈都美

EGGS FROM THE GARDEN

庭先養鶏のススメ。

実はもっとも身近な"鳥"、鶏と暮らす人も奥多摩には多い。鶏を愛する５人の飼い主にQ&A形式で聞いた、
鶏のいる暮らしのリアル。新鮮な卵も、ペットとしての可愛さも同時に得られる鶏との暮らし。ぜひ検討してみては？

Q. どうやって入手した？

入手の経路は大きく3パターンに分けられる。ひとつは購入。「青梅畜産センターでは、生後1日の雛、あるいは30日齢の中雛を、冬の間に事前予約して春に受け取ることができます。生後1日の雛は、5羽で900円でした」(曽田)。畜産センターの他に、ペットショップで買う人もいる。「初めて鶏を飼ったのは20年前。当時は鳥インフルエンザによる規制がなく、ホームセンターで気軽に手に入りました」(中里)。ふたつめは自家繁殖。「今期は孵卵器を使い、人工孵化にも初めて成功。5羽が育っています」(関)というケースや、「道の駅の有精卵を自分で孵化させて育てた」(片倉)というケースもある。「近所で廃棄されそうになっていた小国鶏のつがいを引き取りました」(関)、「夫の定年退職祝いにと、近所の友人から2羽の雛をプレゼントされた」(たかはし)など、引き取りや譲渡も。

Q. 飼育環境は？

奥多摩ではいわゆる「平飼い」が多い。「2階建ての鶏小屋を自作し、1階は土で遊べる土間に、梯子で自由に行き来できるようにしています」(関)、「鶏小屋と網で囲った運動場で飼育するスタイル」(たかはし)と、飼育スペースで十分な運動ができる工夫が。「日中はできるだけ庭に放し飼いにして土浴びや虫探しを自由にさせています」(曽田)、「今はチャボ1羽なので、畑や外に連れていくこともある」(片倉)など、屋外散歩を楽しませるスタイルも。ただ、イタチなどの地上動物から猛禽類まで天敵も多く、対策は必須。「鶏たちが大騒ぎしていると思ったら大型の猛禽が小屋に侵入。トンビだと思ったが、鳥好きの友人に写真を見せたらクマタカだった」(たかはし)と、自然豊かな奥多摩ならではの驚きエピソードも。

Q. どんな種類を飼っている？

鶏には、実にさまざまな品種がいる。世界的に広く飼われている産卵用の実用種であるボリスブラウンやロードアイランドレッドは、丈夫でよく卵を産むよう改良された交配種。奥多摩でも飼っている人は多く、「穏やかで飼いやすく、茶色い羽毛も可愛い」(曽田)。観賞用としても人気のチャボ、高級卵で知られる烏骨鶏も庭先養鶏にはぴったりの種類だ。また、「ボリスブラウン、ロードアイランドレッド、烏骨鶏に加え、行き場がなく引き取った山口県の在来種・小国鶏、今年生まれたハーフの雛5羽など、今は合計21匹がいて賑やかにしています」(関)といった風に、複数種を飼っているケースも。ちなみに、奥多摩に伝わる獅子舞では、雄獅子のたてがみに東天紅という在来種の羽毛が使われる。孔雀のような美しい光沢を持つこの鶏を飼っていた家もあったそうだ。

Q. 卵はどれくらい産む？

鶏は通常、生後5〜6ヶ月ほどで卵を産み始める。若いうちは週に5〜6個ほど産むのが一般的だ。「21羽いるので、ほぼ毎日、安定して産卵が続きます。カフェをやっているのでお店のメニューで使ったり、ご近所へのお裾分けにも使っています」(関)。「収穫した卵は、直売所『コリマ』で青空たまごとして販売することも(今は不定期)。家では朝食にオムレツやキッシュ、シュークリーム、自家製マヨネーズにと大活躍です」(中里)。また、環境によって卵を産む数に変化があることも。「うちにいた、チビという体が小さく群れに溶け込めなかったメスを、大きくておとなしいオスと二羽だけにしてみたんです。それからはずっと寄り添って過ごすようになって、チビもたくさん卵を産むようになりました」(片倉)。ただ、年齢とともにペースは落ち、個体差はあるが、生後2年目あたりから産卵率は徐々に下がり、7〜8年でほとんど産まなくなるという。「今ではほとんど産まなくなったけど、産みすぎると寿命が縮みそうなので、却って安心して付き合えるようになったかも」(たかはし)。

Q. 鶏の魅力とは？

飼い主の数だけエピソードがある。「家から出る食材のカスや、庭の雑草、カメムシやムカデまで喜んで食べてくれる。糞は堆肥にもなる」(関)、「庭で楽しそうに土や草を啄んでいる姿や呼びかけると寄ってくる姿に癒される。犬や猫とはまた違う、こんな癒しの形があったなんて大発見」(曽田)、「それぞれに個性的で愉快で、本当に可愛い。おかげで、すっかり鳥肉が苦手になった」(たかはし)。「鶏も飛ぶんです。ムカデが大好物なのも意外でした。雄鶏は攻撃的でちょっと怖いけど、慣らすと人懐っこくなる。環境の循環が間近で感じられるのも魅力です」(中里)。卵だけではない様々な恩恵が、鶏との暮らしには待ち受けている。









関舞さん
境地区在住。鶏と暮らして6年になる。カフェ「アルソミトラ」でプリンなど、卵を使ったメニューを提供。

たかはしまきさん
栃久保地区在住。2023年から鶏2羽と暮らし、Instagram(@okutamaki)でも発信中。

片倉和彦さん
飼育歴20年。かつて烏骨鶏を飼育し、今は居間でチャボ1羽と暮らし、畑にも連れていく。

中里浩さん
海沢地区在住。鶏を飼って20年のベテランで、卵は古里駅に隣接する直売所『コリマ』で販売することも。

曽田夕紀子さん
大丹波地区在住。今年の春から、待望の鶏のいる暮らしをスタートさせたばかり。

Drones Flying for Okutama



「鳥の視点」で奥多摩を支える。



奥多摩ドローン協会
TEL: 0428-85-2285

奥多摩の空を行き交う、高性能の「鳥」

今は廃校となっている旧・古里中学校の校庭を利用し、活動を続ける奥多摩ドローン協会。もとは「鳥の視点」から奥多摩の風景を撮影したいという有志の集まりから生まれた団体だ。発足から約15年の今では国内でも有数の教育機関「拝島ドローンスクール」と連携し、会員数は140名弱(2026年8月現在)にまで伸びているそうだ。現在は趣味でドローンを楽しむ層に加え、建設業関係者やフォトグラファーなど、自身の仕事とひもづけて飛行技術の習得に励む層がのきなみ増えた。年々、規制強化が進むドローンの飛行。この広大な飛行エリアはドローン愛好家にとって、都内随一の練習場として知られるようになっている。

高齢者の見守りや災害救助などの分野で、積極的な国内での活用が進む高性能ドローン。同協会会長の榎戸健一さんは今後の協会の展開についてこう話す。

「2023年頃からは、奥多摩の河川付近でドローンを飛ばし、機体からの音声でゴミの持ち帰りをアナウンスする試みを始めました。将来的には、奥多摩の山中への物資輸送や血液などの緊急医療輸送、災害のパトロールなどにつながればと、多様な活動を続けています。月2回、楽しみながら活動を行っていますのでぜひ、ご興味ある方はご連絡ください」

今後、町の大きな魅力となり得る、ドローン練習場としての奥多摩エリア。奥多摩の空に飛び交う高性能ドローンが、町民の生活を多面的に支える未来はすぐそこ、なのかもしれない。

Welcome to
OKUTAMA TOWN

東京の森林(もり)へ移住定住のススメ

東京都内での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。
住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

移住・定住応援補助金
奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした方に対して、10万円以上の事業費の1/2以内、最大200万円の補助金を交付します。また、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える各々10万円ずつの商品券を上乗せして支給します。
1)奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合
2)壁、床等に地場木材(多摩産材)を10㎥以上使用した場合
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
●45歳以下の夫婦 ●18歳以下の子どもを持つ世帯
●35歳以下の方

住宅資金借入の利子補給
奥多摩町に定住を目的とした住宅の購入・リフォーム等をされた方に、金融機関などからの資金借入に対する利子補給を行っています。条件は、400万円以上の融資を受け、償還期間が10年以上であること。町内金融機関を利用する場合は、最大年額33万円まで補給します。給付期間は36カ月。
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
●45歳以下の夫婦
●18歳以下の子どもを持つ世帯
●35歳以下の方

子育て支援
子育てのしやすい町を目指し、子育て支援を行っています。おむつ助成、入学祝金、副教材等の支援、中学生制服代、高校生通学定期代など、子育ての負担を軽減するための助成があります。

その他
①安く家が借りられる町営若者住宅 ②空家バンク制度 ③町が整備した分譲地、一定の条件で住宅がもらえる事業など、ほかにも定住および子育てにまつわるさまざまな支援を行っています。

お問い合わせ：奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428-83-2310 http://www.town.okutama.tokyo.jp

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel.] Miguel Utsunomiya [miguel.] Art direction: Atsushi Kodani Design: Yasuko Kitaguchi Illustration: Toshiyuki Hirano
発行:東京都奥多摩町 https://www.town.okutama.tokyo.jp 編集&制作:株式会社ミグル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp
2026年10月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。
COVER STORY / 羽毛を持つのは、現在の生き物では鳥だけ。色も形も、一枚ごとに違う機能美の結晶だ

